

研究ノート

歌手・鳳飛飛からみる台湾社会 —「女工のアイドル」から「国民的歌手」へ—

廣瀬光沙

はじめに

台湾の女性歌手、鳳飛飛は日本ではあまり馴染みがないが、戦後台湾の流行音楽シーン、あるいはさらに踏み込んで音楽文化、大衆文化史等々を語る時、欠かすことのできない存在である。鳳は、1970年代初頭に歌手として活動を始め、70年代中ごろから芸能界で頭角を現し、お茶の間で「大スター」と称されるまでになり、2012年に死去した後も「国民的歌手」として語り継がれている人物である。日本では、「アジアの歌姫」と呼ばれ日本デビューも果たしたテレサ・テンの知名度が圧倒的に高いが、鳳もテレサと同じ1953年生まれであり、テレサは10歳の時、鳳は15歳の時にラジオ局が主催する歌唱コンテストに参加し、優れた成績を収めたことをきっかけに歌手としての道を歩み始めることになる。この二人はともに著名な音楽プロデューサー、劉家昌の弟子であるなど、何かと共通点も多いが、歌手あるいはタレントとしてのスタイル、活動内容、そして彼女たち自身の出生背景においては、非常に対照的な特徴を持つ。

鳳の活躍の場はテレビに映画にと多様であり、歌手だけでなく女優や司会者としての顔も持っていた。本研究ノートは、第一に、台湾の戦後史や流行音楽などの大衆文化を研究するにあたって興味深い研究対象として鳳飛飛という歌手を紹介し、第二に、鳳飛飛という歌手を材料にして、より深く掘り下げることができそうなトピックを探ることを主な目的とする。実のところ日本ではもちろん、台湾においても鳳飛飛をメインテーマにして学術的な手法で論じようとする研究者は少なく、陳建志[2009]による『流水年華鳳飛飛』が「鳳学」の第一歩として評価されている程度である¹。しかし同書も、鳳の活動をスケッチするにとどまっていて、過去の新聞や雑誌記事等の文字資料

にはほとんど触れていない。また活動全盛期である 1970～80 年代についても、その活動内容を当時の時代背景との関連下で考察することは十分になされておらず、その点でも鳳飛飛という歌手を研究する余地は大いにある。

1. ブームとなった鳳飛飛スタイル

鳳飛飛がどのような歌手であったのかを描き出すために、鳳について書かれた新聞や雑誌の記事の紹介から始めたい。鳳の活動場所は主にテレビであり、経済成長の波に乗って一般家庭に急速に普及しつつあったテレビは、戦後の日本と同様に台湾でも重要な役割を果たしたメディアであった。レコードやラジオのようなメディアとは異なり、視覚情報を伝達するテレビにおいては、当然、歌手の容姿や風貌が視聴者の目に触れ、歌手はその歌唱で人々を魅了させなければならぬだけでなく、ファッションやヘアスタイル、メイクなどのセンスが問われる。当時の新聞記事には、鳳の特徴的なスタイルについて指摘したものがしばしば登場する。

「……普段、彼女の衣装は地味でたいして化粧もせず、ごく普通の女学生ようである。派手ではなく、すっきりした印象を与える。そのため、彼女に会う人はよく『鳳飛飛って、ほんとにスターっぽくない!』と話す。」²

「着ているものはオシャレではないが、彼女を愛する観衆は依然として多い。その理由は、彼女のこういう身なりが親しみやすさを感じさせ、スターらしくなくてむしろ隣の家の女の子のようで、いつでも会えるしいつでも近づけると感じさせるところにあるのだ。」³

「鳳飛飛の衣装代が一番少ないと言う人もいる。なぜなら彼女は日常生活だろうがテレビや音楽ホールのステージの上だろうがどこでも気張らない服装で、シャツに長ズボンのいでたち。これは彼女の『登録商標』になった。」⁴

鳳には「帽子の歌姫」という愛称があるほど、帽子をかぶってステージに上がることが非常に多かったが、加えて上記に指摘されているような、シャツ、ズボン、ジャケット、そしてヒールのない平たい靴というカジュアルでメンズライクなファッションスタイルを基本としていた。このスタイルは、レコード会社がまだ個々の歌手のイメージ作りに力を入れていなかった時代に、鳳と彼女の母が偶然に編み出したものである。上記のような記事からは、一般的に華やかなイメージの強い「スター」とはギャップのある彼女の地味な衣装と薄化粧というスタイルが、むしろ視聴者に好印象を与えていたことが分かる。



図 1 テレビ番組の中の鳳飛飛

鳳と同時代に活躍した国語流行歌⁵の女性歌手には、マカオ出身でオーストリア人の血を引く、西洋人風の顔立ちが印象的な甄妮（ジェニー・ツェン）、女性らしく華やかなメイクと衣装に加え、ところどころしゃくりを入れたり吐息交じりの声を使ったりするセクシーな歌い回しが得意な崔苔菁（ルイズ・ツイ）、そして先ほども少し触れたが、北京語だけでなく広東語、日本語など多言語を操り、台湾を飛び出して「アジアの歌姫」と呼ばれた鄧麗君（テレサ・テン）といった歌手がいる（図 2 参照）。彼女たちがワンピースや光沢のあるドレス、ラウンドネックのカットソーといった女性らしい服装で登場することが多い一方で、デビュー初期の鳳の衣装はそれと対照的である。例えばそれぞれのレコードのジャケット写真を参考に見てみると、歌手のイメージ作りの違いが見て取れるようで興味深い。鳳の場合は 1973 年のアルバム『愛的礼物』（図 3 参照）など、黒のボーラーハットに白シャツ、黒の

ベストという、日本で言えば「ピンキーとキラーズ」の女性ボーカルを彷彿とさせるような男性的ないでたちのものもある。また、鳳のヘアスタイルに注目してみると、やはり帽子をかぶっている場合が一番多いが、三つ編みのおさげのような、大人の女性というよりも健康的な少年・少女の雰囲気を感ぜさせるものが多い（図4参照）。



図2 左から甄妮『黎明鐘聲』（1975年、海山唱片）、崔苔菁『愛神 愛人的祝福』（1977年、麗歌唱片）、鄧麗君『島國情歌第一集再見我的愛人』（1975年、寶麗多）



図3 アルバム『愛的禮物』（1973年、海山唱片）のジャケット



図4 左からアルバム『巧合』（1975年、海山唱片）、『微笑』（1975年、海山唱片）、『懷念/懷念老歌』（1976年、海山唱片）

テレビに登場する歌手としては意外性のある姿がもの珍しく思われて注目を浴びたようであるが、とはいえ、同時代に鳳や他の女性歌手と同じ 10 代後半や 20 代前半だった若者からすれば、厚化粧に派手なドレスを着た歌手よりも飾らない身なりをした鳳の方がよほど親しみやすく、手の届く存在に感じられただろう。当時のファンのコメントには以下のようなものがある。

「彼女は外見がすごくきれいなわけではないし、ミス・ユニバースのようなスタイルでもない。口が上手いわけでもない。でも台湾中で人気の歌手です。……欧米の影響を受けていなくて、素朴で飾り気のない姿がかえって印象的です。けれど、観衆が彼女を愛する気持ちに変わりはありません。やぼったいけれど、ふるさとの雰囲気を感じられます。飾り気がないけど、それは彼女の偽りない一面です。観衆は美しい外見が好きなのでも、美人が饒舌に喋るのをいいと思うわけでもなく、やぼったくて素朴さの感じられる姿が好きなんです。みんなきっと私と同じ考えだと思います。」⁶

「鳳飛飛が起こしたブームは、彼女の平凡さによるものであることはもちろんですが、その平凡さのなかに自然な美しさがあります。」⁷

鳳の人気が出始めてから彼女の「学生スタイルの、さっぱりしていて自然な装いとかかわいらしい動作を真似した⁸」歌手もあとから登場し、悪く言えばダサく、やぼったい鳳飛飛スタイルは、「素朴で飾り気がない」、「かわいらしい」、「女学生」風といったプラスイメージに変換され、既存の女性歌手とは異なる路線を切り拓くことになったと言える。

また、鳳の持ち歌については、日本の演歌や歌謡曲に近い曲調のものや、アップテンポなポップスからゆったりとしたバラードまでさまざまであるが、晩年のコンサートでも繰り返し演奏されたような代表曲の中には、鳳飛飛という歌手自身の人生像（歌手として成功し、他方で結婚・出産を経験して子育てをしながらも仕事をやめずに夢を追い続けてきた）と重なるような内容のものが散見される。洋楽や日本の曲も積極的にカバーしており、70年代は

ちあきなおみの『喝采』や八代亜紀の『長崎はみなと町』、細川たかしの『心のこり』など、80年代は中島みゆきの『この世に二人だけ』、安全地帯の『彼女は何かを知っている』などをカバーし、北京語の歌詞をつけて歌った。曲によっては原曲の歌詞と全く違った内容の歌詞になっているが、日本国内で人気の高い歌手や楽曲を、いち早く取り入れようとしていた姿勢がうかがえる。

2. 言語統制下での歌手活動と大衆娯楽

次に、もう少し詳しく鳳の経歴と人気を得た理由について、時代背景を織り交ぜながら述べる。鳳は先述のとおり 1953 年に、台北の北部に位置する大溪というのどかな田舎町に生まれた。両親は日本による植民地時代を経験した本省人である。後に鳳がキャバレーやナイトクラブなどで日本語の曲を歌うことになった際、父親が言葉の意味や発音を教えることがあったそうだ。一家の母語は閩南語、いわゆる台湾語⁹であり、鳳にとって国語（北京語）はいわば第二言語で、幼いころから学校で国語を学ばせられたとしても、耳馴染みがあり、また愛着があり、感情をストレートに表そうとする際に発される言葉はどうしても台湾語なのである¹⁰。一方、日本でもお馴染みのテレサ・テンは台湾の中部にある雲林県に生まれ、蒋介石とともに大陸から台湾に逃れてきた軍人の父を持つ外省人の第二世代で、本籍は父の故郷である中国大陸の河北省大名県である。鳳に対してテレサは北京語が母語だ¹¹。二人の歌手のエスニシティの違い、及び母語とする言語の違いは、両者の歌手像やファン層、活動の方向性における違いに少なからず影響を与えている。また、鳳飛飛という歌手を考える上で、台湾語を母語とする本省人であるという、言語とエスニシティに起因する身体的な記号性は、当時の数多い女性歌手の中から鳳が飛び抜けてトップスターの座を射止めた理由を探るための一つの鍵でもある。

ところで、鳳飛飛はしばしば「戦後台湾における流行歌手／女性歌手」という紹介のされ方をする。ここでは、いわゆるポツダム宣言受諾を契機に日本が名実ともに敗戦を迎え、第二次世界大戦が終結し、台湾の植民地支配にも区切りがついた 1945 年 8 月 15 日以降の時代を便宜的に「戦後」という言

葉で表現している。そこで、なぜ鳳飛飛について語るにあたって「戦後」とそれ以前とを分け、彼女が戦後台湾の歌手であると説明書きを加える必要があるのかという点、それは歌手の活動を左右する社会背景が大きく変化するきっかけとなったのが日本の敗戦であり、植民地時代の終わり、すなわち国民党政権による専制政治の始まりであったと捉えられるからだ。とりわけ、専制政治の過程で確立されていった歌手という職業の市民をめぐる法制度—職業許可証としての「歌手証」や「歌手俳優登録証」の発行のための申請・審査制度、ラジオやテレビなど歌手の活動の場でもあるマスメディアに対する法規制など—を中心とする数々の制約は当然、歌手の活動に影響を与えた¹²。そのうち言語に関わる法規制は、歌い手である歌手にとっても、聴き手である一般大衆にとっても特に重要な事柄である。なぜならば、言語は歌唱における重要な表現の道具であり、表現そのものでもあるからだ。戦前に日本語教育を受けた人びと、戦後に北京語教育を受けた人びと、大陸からやってきた北京語話者、そして日本語にも北京語にも馴染みがない台湾語話者や原住民語話者など、複数の言語話者が入り混じる台湾社会においては、「どの言語で歌うのか／歌えるのか」という問題の答え次第で、歌手の活動の可能性が左右されることになる。

台湾が中華民国に“光復”したのち、植民者の言葉である日本語の使用は制約されるようになり、台湾語や原住民語など台湾各地域の「方言」とされた言葉は、日本語に比べれば寛容な扱いを受けたが、「国語」となった北京語の普及を目指す政府の政策「国語推進運動」の一環で、特に新聞、ラジオ、テレビといったメディア上での使用が制限されるようになる。鳳が歌手として活動を始めたのは 1970 年代初頭、ちょうどテレビが一般家庭に普及し、主流メディアになりつつある頃で、テレビの影響力を考慮した政府の方針により言語統制が強化され、テレビ放送の中から「方言」の占める割合が減らされてゆく時期でもあった。例えば、テレビ局開局当時から「群星会¹³」などの歌番組が放送されて人気を博してきたが、台湾語の歌については一つの番組につき二曲までという取り決めが課されていた。政治権力による台湾語への抑圧と、それに伴う台湾語流行歌市場の縮小により、1970 年代以降の流行歌の主流はもっぱら国語流行歌となった。一方で、1950～60 年代にレコ

ードやラジオで盛んに演奏されていた台湾語流行歌というのも完全に消滅してしまっただけではなく、一種の「地下音楽」のようにして、都市台北の音楽産業からは離れ南部の小規模の街や農村にその舞台を移し、歌われ続けていた¹⁴。このような現象は、台北を中心にテレビという主流メディアの舞台で歌手として成功するためには、国語流行歌を歌うという道で成功しなければならなかったことを示唆している。

こういった背景の下、鳳は歌唱コンクール入賞後に「林茜」という名前で歌手活動を始め、当時の歌手にとって登竜門であったキャバレーやナイトクラブで歌い、厳しい下積み時代を過ごしていた。そんな折の1972年、中華電視会社の台湾語ドラマ『燕雙飛』に女剣士の役柄で出演し、同名主題歌を台湾語で歌う機会を得たことで、鳳に転機が訪れた。鳳の歌と演技を評価したプロデューサー張宗榮の勧めで芸名を「鳳飛飛」に改名し、さらにこのドラマと主題歌がきっかけで中国電視公司から誘いがあり、同テレビ局専属の歌手となる。まさしく歌手「鳳飛飛」の誕生の時であり、彼女の主要な活動の舞台も、劇場からテレビの中へと移っていったのだった。

鳳が目目され始めると、中には彼女の話す国語が「標準的でない」として、批判を向ける人びとがいた。鳳は歌唱の大半を国語で行い、国語流行歌の歌手として活動したが、その歌唱や会話の中で国語を使う際に、捲舌音などの国語特有の発音の部分がどうしても不鮮明で、「台湾語訛りの国語」になってしまうことがしばしばあった。特に初期のレコードを聴けば、その特徴的な訛りのある発音を顕著に聞きとることができる。台北から離れるほど訛りは強くなるとも言われ、台湾語訛りの国語は田舎っぽさ、ダサさ、俗っぽさ、垢抜けなさの象徴でもあった。それは時に批判の矛先を向けられ、「国語化」されてゆくテレビの中では異色として扱われることがあったものの、台湾社会の大多数の人びとにとっての現実の言葉に近いものであった。その上、先述のような「素朴で飾り気がない」、「かわいらしい」、「女学生」風のファッションスタイルとともに相乗効果を成し、結果として視聴者から親近感や好感を抱かれるポイントとなった。当時を振り返る人は、「彼女の虫イロがはっきりしない訛りは、大多数の台湾人が話した国語で、親しみがあって、隔たりを感じさせなかった」¹⁵と話す。また、鳳はデビュー当初に「楊麗花

のような顔立ちの鳳飛飛」¹⁶と新聞で紹介されたことがある。楊麗花とは台湾の伝統芸能である歌仔戲の役者のことで、女性でありながら男役を演じていた人物だ。楊は台湾電視会社が設立した台視歌仔戲団の看板俳優として演じ、出演した歌仔戲の番組は台湾語のテレビ番組の中でも一際人気を得ていたが、歌仔戲や布袋戲といった台湾でごく一般的な大衆伝統芸能でさえも言語統制の波から免れることはできなかった。そんな中での鳳飛飛という歌手の登場は、テレビから台湾語の番組が減らされ、楊麗花のような慣れ親しんだスターたちの姿が少なくなりつつあった頃ともちょうど時期を同じくしている。

先述のように、鳳はテレビドラマへの出演がきっかけで活動の幅が広がったが、彼女の知名度が上がり大スターへと成長していく過程には、テレビ番組の司会を務めたことが大きい。鳳は1976年から『我愛週末』、『你愛週末』、『一道彩虹』といった歌番組、バラエティ番組のレギュラー司会を務めるようになったが、テレビ放送への統制が厳しく、字幕ひとつでさえ厳しくチェックされる時代に、コンサートホールをそのまま撮影場所として、演奏やトーク、コントやマジックショーを生放送で視聴者に届けるという、台湾のテレビ史にも残る当時としては画期的な試みの先駆者となった。撮影場所のコンサートホールには毎週観客が集まり、鳳や出演する歌手たちの演奏を生で聴いている姿がある。テレビというメディアがまだ新しくあった時代に、テレビを通して生ライブの雰囲気味わえるという演出は、ブラウン管の前の人びとを惹きつけてやまなかっただろう。番組の最後には、鳳が観客席の前列に座る人たちに近づいて行き、順番に握手を交わす姿がエンドロールとともに流れる。毎週一回、決まった時間に放送され、お茶の間を楽しませる番組とそこでの演出は、鳳と視聴者との距離を一気に縮めるとともに、親しみやすい歌手像を印象付けたと言える。ちなみにこの頃のテレサ・テンはというと、台湾を飛び出して日本デビューを試み、新宿の小さなライブハウスであてやかなチャイナドレスに身を包みステージに上がっていた¹⁷。台湾の同じ時代を彩った、知名度も人気度も同様に高い歌手ではあるが、鳳の活動の土台となったのは台湾の大衆に向けて歌を披露する場であり、それは結婚して香港に移住したのちも変わらず、晩年まで一貫している。

以上のように、テレビという新しいメディアが登場、普及し、大衆の娯楽の中心となる一方で、それは体制側からの規制の対象にもなった。言語統制が大衆の楽しみを奪う中で新たに登場した歌手、鳳飛飛は、台湾語訛りの国語で歌い、話し、親しみやすいトークと風貌でお茶の間とステージの距離を縮めて人気を集め、スターの道へと歩み始めたのである。

3. 女工に寄り添い、本省人の心を歌う歌手

鳳飛飛は、台湾で初めて公式のファンクラブができた歌手としても有名で、鳳自身もファンとの交流に重きを置いていたようである。2012年に鳳が亡くなってからも、熱心なファンによって「鳳学会」というコミュニティが新たに結成され、月に一度はイベントが開催されている他、鳳が亡くなった月である1月には追悼イベントが開催される。普段は当時の貴重な映像資料を上映したり、鳳が歌った曲や出演した番組、映画などに関する景品付きクイズを行ったりしており、それはファン交流の場であると同時に、出演映画のフィルム修復のために寄付を集め、実際に修復を成し遂げてニュースでも報道されるなど、鳳に関するあらゆる媒体資料を蒐集・保存し、世間により広く功績を語り継いでゆくための発信基地のような存在でもある。

イベントに参加する熱心なファンの大半は女性であるが、もちろん男性の姿も見られ、40～60代くらいの参加者の中に時折、家族に影響されてファンになったという小中高生の姿もある。一見しただけではファン層を見極めることが難しそうであるが、1970～80年代の鳳の活動を振り返る際に「女工」と呼ばれるファンの女性たちの存在が話題にのぼることがある。鳳は「帽子の歌姫」の愛称で有名であるが、70年代には芸能雑誌や新聞記事の中でしばしば「女工のアイドル（女工偶像）」と称され、1981年に台湾南部の工場で慰問公演を行った際には「労働者の天使（劳工天使）」とも呼ばれ、多くの女工や工場労働者から人気を集めるとともに、当時の経済発展の象徴としてもイメージされたという¹⁸。この点においても、テレサ・テンが軍隊への慰問を熱心に行い「軍人の恋人」と呼ばれたことと対照的である。「労働者」に比べ非日常的かつ限定的な存在である「軍人」。中性化された「天使」と恋愛対象としての（ここでは男性性を象徴する「軍人」）に対して女性性が強調され

る)「恋人」。労働者にとって、時に励まし、時に笑いを与え、疲れを癒してくれる天使のような存在の鳳飛飛と、軍人にとって、独り占めしたくなるような恋い焦がれる存在のテレサ・テン。これらの愛称は、二人の歌手が一般大衆を与えてきたイメージと距離感の違いを如実に表しているようだ。

では、鳳はなぜ「女工」たちから支持されたのか。1949年以降、大陸から台湾に逃れ「大陸反攻」に向けて勢力を整えようとした国民党政府にとって、まずもって台湾の近代化・中華民国としての国際的地位の上昇・それに向けた工業発展による経済建設が最重要課題のひとつとされていた。1950～70年代にかけてその工業発展の基盤を支えたのが紡織業や電子業といった軽工業であり、工場での労働力として召集されたのが女性労働者「女工」であった。女工たちは新たな働き手として重要視されたが、農村共同体としても余剰労働力を生かせるという利点があり、同時に女性たちとしても家から離れて自立した生活ができる上に技術が身に付くといったメリットがあり、故郷を離れて都会へ出て働く女性たちが数多く現れた¹⁹。女工の大多数は本省人であり²⁰、彼女らは戦後台湾における女性の社会進出のはじまりを象徴してもいた。一方で、低賃金、悪質な労働環境による健康の侵害・死に至る病、長時間労働といった労働環境の劣悪さが深刻な問題でもあった。時には男性上司からの性的な嫌がらせに耐えなければならないという場面もあったようだ²¹。

大溪という田舎の出身地から都会である台北に身一つで上京して歌手として成功した彼女の姿には、女工たちにとって自分の身の上とも重ねあわせることのできる部分もあり、かつ「台湾語訛りの国語」を話す本省人でありながらも、成功を収めた歌手という点に対して強い憧れもあったと思われる。当時の雑誌記事では、鳳は女工に似ているから人気があるのだと言われ²²、さらには、鳳の曲は「女工に聴かせる(給女工聽的)」音楽だと見なされたために音楽性が評価されてこなかったというエピソードがあるほど²³、女工たちからの支持の厚さが一般的に印象付けられていたことがうかがえる。ネット上には以下のようなエピソードが残されている。

「私は高雄の左営に住んでいました。楠梓加工輸出区²⁴からとても近く、

幼い頃カセットが欲しければ、夜市に行つて安い海賊版カセットを買いました。屋台の上に見えるのはほとんどが彼女（鳳）の作品集でしたが、なかなか欲しいものが見つけれず、あるとき店主に聞いたことがあります。店主は答えて言いました、あ～鳳飛飛の歌ね、みんな好きだね、あの加工輸出区の女の子たちは特に好きなんだよね、と。」²⁵

鳳は1981年10月にこの高雄にある楠梓加工輸出区と台中の潭子加工区に慰問に訪れており、各公演ともに一万名を超える観客の前でステージを披露した。その様子は後日、中国電視公司により『鳳兒有情——勞工之夜』と題して放送された。当時のことを記した新聞記事には、「念願のアイドル」である鳳飛飛に「大切な贈り物」を渡そうと詰めかけた女工たちに囲まれ、身動きがとれなくなっている鳳の様子が描かれている²⁶。

また、鳳が歌う曲の中には女工たちの心に寄り添うかのような、前向きな応援ソング的なものや、夢に向かって努力する自分自身を励ます曲や、故郷や愛する人から遠く離れた場所にいる者の心情を描いた曲が数々ある。

陽気な歌手になって世界をあちこちまわりたい
古いギターを弾きながら理想を探し求める
あなたがくれたはなむけの写真は
いつでも私を励ましてくれる
長い距離を歩いたけれど寂しくはない
あなたの笑顔を見て高らかに歌う
歌えよ歌え 早く夢を叶えよう

昨夜窓にもたれて書いたあの歌
古いギターを弾きながらあなたに語りかける
あなたと故郷がどれほど恋しいか
伝えるための歌
昔のメロディーを歌うと 楽しかったところが蘇える
旅の物語を歌にしよう

歌えよ歌え 早く夢を叶えよう

—「做個快樂歌手」1978年

私は旅人 あなたも旅人
あなたと私 愛情を通い合わせ 魂が触れ合う
故郷を離れた者だけが その人を理解できる
雨風があなたを濡らせば 私の心も濡れているよう
あなたは私を忘れたりしない
あなたは私のことを想ってくれている
どうかくれぐれも気を付けて……

—「出外的人」1983年

このように、鳳は本省人の女性歌手として女工たちからの共感を集め、憧れの対象ともなることで大きな支持を得ていったが、このほかにもう一点、鳳自身の本省人というエスニシティと深く関わる重要な事柄がある。それは、鳳が国語流行歌だけでなく台湾語歌謡²⁷を積極的に歌い、番組での演唱、レコードの制作に力を入れ、ついにはほぼすべて台湾語で進行されるテレビ番組を製作するに至ったことである。先述のように、テレビ放送の開始後、放送メディアにおける使用言語への取り締まりが厳格化され、台湾語やそのほかの「方言」とされた言語は排除され、「国語」である北京語に一本化されようとしていた。それは一方では台湾語流行歌市場の委縮に繋がり、一方では群星会などの国語流行歌をメインとした音楽番組の製作を促し、国語流行歌の盛隆を後押しした。しかし 80年代に入ると、演技の自然さやリアリティを優先するべきとして、国語ドラマのセリフの一部に台湾語が使用されはじめなどの変化が表れはじめた。1983年に公開された台湾ニューシネマの監督による映画『坊やの人形』（侯孝賢）、『海を見つめる日』（楊徳昌）の一部には台湾語が挿入され、国語への吹き替えという慣例が打破される²⁸。このような時代の動きにやや先立つ 1982年、光復節を祝うための特別番組『鳳懷郷土情』（中国電視公司）がほぼ全編台湾語で放送され、その司会進行を鳳が務めた。

この番組の構成やナレーションの内容、曲紹介の仕方などを見てゆくと、台湾語歌謡とは一見あまり関係のなさそうな「中華文化の発揚」や「反共」の必要性について訴えたり、植民地期の台湾語の流行歌を、台湾人による「抗日」の記憶として紹介したりするなど、光復節を祝うという主旨からも推察できるように政府のイデオロギーに関わる要素を所々に盛り込み、プロパガンダとしての側面をもった番組になっていることが分かる。同番組は 1982 年に第一回目が放送され、その後 1983 年、1985 年と合計三回放送された。基本的にはいずれも「抗日」の文脈から台湾語歌謡を紹介することがメインであり、中には中国共産党による統一戦線工作²⁹に対抗するかのような内容のナレーションが見受けられるが、第三回目になると蔣経国による十大建設³⁰の成果をアピールするロケ映像が曲と曲の間にはさまれ、ヘリコプターに乗った鳳が上空から十大建設計画によって建てられた橋などのインフラ施設や台湾の自然を次々と紹介するという、新たな趣向が見られる。

「台湾巡礼、今日テレビで初めて詳しく紹介します。私たちの美しい宝島、先ほどの場面からは、この愛しい国土、愛しい土地への深い愛情を実感したことでしょう。より一層、郷土（ふるさと）への想いが溢れ出します。見てください、あの青々とした田んぼ。ここは米の生産量が最も豊かな場所、嘉南平原です。」

「政府の主導に感謝するだけでなく、またさらに私たちの土地のために努力し、血と汗を費やした一人一人の同胞たちに感謝しなければなりません。光復 40 周年の今日、私たちはともに努力し、協力し、もう一つの新たな目標のために前進しなければなりません。自分たちのために、この国土のために、私たちの行動と表現で、光復節の意義を高めていけることを願います。」³¹

これは鳳による上空からのレポートの内容を抜粋したもののだが、彼女の口からは「国土」という言葉が頻出する。全三回の放送の中では第三回目で始めて登場する言葉だ。番組内で紹介される映像はもちろんすべて台湾島内の

ものであり、十大建設も台湾島内に限られた計画である。つまりこの番組の中で示されている「国土」には、大陸の面影がどこにもない。そこにあるのは「我々の美しい宝島」と呼ばれる「国土」＝台湾だけである。このような構成の番組が放送を許されるということは、台湾の一般の人びとだけでなく政権自体が、大陸反攻は不可能であるという現実を公的に受け止めつつあったこととリンクしているのではないだろうか。この番組を材料にして、テレビという国民の目に触れるマスメディア、大衆娯楽を利用して当時の政権のイデオロギーや政策方針がどのように伝えられようとしていたか考察することもでき非常に興味深いのが、本研究ノートの紙幅だけでは足りそうにないので、詳細については割愛する。

さて、上述の番組はプロパガンダ色が濃いものではあったが、それとは関係なく鳳自身に台湾語歌謡に対する特別な思い入れがあり、このような台湾語歌謡を特集する番組を製作したいという思いがあったことは間違いない。鳳はこの番組以前にも、当時の言語統制が許す範囲内で自身の出演する音楽番組や司会するバラエティ番組で好んで台湾語歌謡を披露した。それは後に作家の小野から台湾語歌謡の「生きる百科事典」と言われたほど昔の台湾語歌謡にも詳しく³²、これを愛して止まなかった鳳の母親からの影響が大きく、幼いころから慣れ親しんできたからであるというのはもちろんだが、加えて鳳を動機付けたきっかけは冠番組「我愛週末³³」での出来事であった。

「番組を三、四回放送した後、私は一、二曲の台湾初期の歌謡曲を準備してみました。初めて演奏したのは『月夜愁³⁴』です。観衆の反応が非常に熱く、こういった台湾語歌謡を歌い続けて欲しいと、要望されるとは思ってもみませんでした。その時になって私は実感したのです、台湾語歌謡を好きな人たちが実はこんなにもこんなにも多いことを。」³⁵

鳳が「試しに」歌ってみた台湾語歌謡は観衆から思った以上の好評を得て、彼女もまたそのニーズを感じ取ったことから歌い続けることになったのである。さらに番組内だけではなく、台湾語歌謡のレコード化にも積極的に取り組む。1977年から79年の間に歌林レコードから『心酸酸 台灣民謠 1』³⁶、

『月夜嘆 台湾民謡 2』³⁷、『西北雨 台湾民謡 3』³⁸と題したレコードを出しており、日本植民地時代に創作された流行歌から古い伝承民謡まで、鳳の歌う台湾語歌謡が収録されている。また、小野と協力して台湾語歌謡の創作者たちが残した未発表の譜面などを蒐集し、1992年にアルバム『想要弾同調』³⁹としてリリースしていることは特筆に値する。ここには未発表曲だけでなく、それまであまり注目されてこなかった曲を改めて発掘し、編曲したものや、シンガーソングライターの羅大佑⁴⁰によって新たに作詞、作曲された台湾語歌謡が収録されている。埋もれていた台湾語歌謡を発掘したという意味でも評価され、1995年にリリースされた同名アルバムシリーズの第二弾とともに、ファンから愛され続けているアルバムのひとつである。鳳は亡くなる一年前に、念願であった台湾語歌謡をテーマにしたコンサートを開催する予定であった。体調不良のため延期となり、そのまま終に叶わなかったことは非常に残念であるが、デビュー当初から晩年まで一貫して台湾語歌謡を大切に歌い続けてきたことは、鳳飛飛という歌手の存在と台湾語歌謡とを切り離せないものにしたと言える。

4. 鳳飛飛とアイデンティティ・ポリティクス

ここまで鳳飛飛という歌手について本省人という彼女のエスニシティをキーワードに述べてきた。エスニシティに由来する言語的特徴や、親しみやすさを強調したテレビ番組での活躍、経済発展を支えた「女工」や台湾語歌謡との繋がり、現在に至るまで台湾の大衆の記憶に深く刻まれているようで、彼女の死後にメディア上に溢れたコメントや回想文の中には、鳳飛飛をして「台湾流行音楽本土化の第一人者⁴¹」、「本土的な司会の風格を生み出した⁴²」歌手とするような評価が散見される。中には彼女が活躍した時代のことを、濃厚なノスタルジーを込めて回想する人々もいる。

「鳳飛飛が歩んだのは前向きで積極的に奮い立った時代、台湾が経済成長し、社会が比較的純粋だった時代。鳳飛飛のパフォーマンスは大勢の人生に素晴らしい思い出を残しただけでなく、台湾にかつてあった昂揚、楽天性、社会全体の自信とともに光り輝いている。鳳飛飛を懐かしむと同時に

に、多くの人が思わず、あの頃、我々がともに過ごした美しい日々を追憶する。とはいえ、あのような時代にはもう戻れないのかもしれない。」⁴³

「鳳飛飛はなぜ名残惜しまれるのか？原因は、彼女の歌声が台湾の民国40年、50年、60年代生まれの人びとの成長に寄り添っていたということ、彼女の奮闘、出世と台湾社会の上昇はシンクロしていたということ、彼女の素朴さ、純粹さ、善良さ、美しさ、楽天さ、そして自信もまた、当時の台湾社会の雰囲気そのものだったということにある。」⁴⁴

「私が覚えているのは、故郷を離れて暮らす大勢の若者を、その歌声で慰めていた彼女。そして、『しっかり努力すれば、未来にはきっと希望がある』と信じていた、純粹な時代だ。心から敬意を表します。」⁴⁵

鳳飛飛という歌手とその活動は当時の時代背景を顕著に映しだすがゆえに、こういった台湾社会の集団的記憶に結びつく側面があることは確かである。また、「台湾人の心に映る台湾とは、おそらく城隍廟、擔仔麵、魚丸湯、そして鳳飛飛のことだろう」という詹宏志の有名な言葉があるように、鳳はしばしば「台湾」や「台湾人」のアイデンティティを象徴するような人物として表象されることもある⁴⁶。

しかし、こういった集団的記憶の形成、台湾人アイデンティティに言及する語りの傍らで見逃される鳳飛飛のもう一側面があることを指摘しておきたい。それは鳳が国民党政府の政策に協力し、さまざまな「愛国活動」を行ってきたことである。

ここで言う「愛国活動」とは、歌手という職業の者が愛国精神を表現するために、より具体的に言えば、政府の政策に協力するために行った活動のことを指す。戒嚴令解除以前の台湾において、好むと好まざるとに関わらず「愛国歌曲」とされるプロパガンダ楽曲を歌えることは歌手の必須条件であり、また時には国軍兵士の慰問のためにテレビ局が所属タレントを派遣することもあった。鳳も同様に愛国歌曲を歌い、抗日をテーマにした愛国映画『春寒』⁴⁷にもヒロインとして出演し、さらには1982年1月に「鳳情千千萬：三民

主義飛向大陸義演晩会」と題したチャリティコンサートを企画・開催する⁴⁸。チャリティで集まったお金は中国大陸災胞救済総会（中国大陸で苦しむ同胞を救う会）に寄付され、寄付金はすべて「三民主義」について書いた冊子 100 万冊を大陸に向けて飛ばすための費用に充てるということだった⁴⁹。コンサートの終盤では、大陸中国から台湾へ亡命してきた「反共義士⁵⁰」が舞台上に招かれて紹介されるシーンもある。鳳が本チャリティコンサートを行った背景には国民党の反共政策があるのはもちろんのこと、結婚を機に移住した先の香港で自身が見聞きしたこととも関係しているようである。当時の新聞インタビューで鳳は以下のように語っている。

「香港は最も敏感な場所です。私はよく現地で竹のカーテンから出てきた同胞たちに出会います。大陸の同胞たちは国内（中華民国）の生活にとっても憧れていると感じます。それで、三民主義の冊子を竹のカーテンの向こうへ飛ばし、私たちの生活の様子を理解してもらおうと決意しました。冊子を飛ばすことが実質的になんの役に立たないとしても、精神的な助けになることを願っています。私のカセットを大陸に飛ばしてもいいと思っています⁵¹。」⁵²

「今回の『三民主義飛向大陸（三民主義を大陸へ）』というチャリティ公演は、一方では頃合いよく政府の呼びかけと一致し、もう一方では私の二年間に見聞きしてきたことに由来します。香港では、大陸の同胞が命の危険を冒して密航するのを目の当たりにします。幸い岸に登ることができても、往々にしてまた押し返される状況です。……彼らの無力と絶望の目つきは本当に見るに堪えられませんでした。私は痛ましく考え込みます、同胞のためになにができるのだろうか。」⁵³



図 5 中国大陸災胞救済総会の理事長谷正綱に収益金を届ける鳳飛飛（『聯合報』1982年1月11日）

鳳はこのほかにも、海外の中華系移民を訪問してパフォーマンスを披露したり、障害者のためのチャリティコンサートを開催したりするなど、特に1980年前後を境に社会貢献を目的とした慈善活動に熱心に取り組むようになったが、その活動には上記のような「愛国活動」ともとれるものが含まれている。在米台湾人のための同郷会である「台湾同郷聯誼会」からたびたび要請を受けて現地に赴いていたことも注目に値する⁵⁴。同会は、表向きは「台湾」という土地を共通の「同郷」とするアメリカ居留者の連帯感を高め、相互に助け合うことを目的として自主的に設立された団体ということになっている。だが実際は、台湾独立を主張する在米台湾人たちの組織に対抗する意図があって国民党指導の下で結成され、中国ナショナリズムという明確な政治主張を持った団体であり、台湾独立派の同郷人会とはしばしば対立関係にあった⁵⁵。この団体との関わりを主とした在米台湾人のための演唱活動により、鳳は1981年7月に中華文化基金会から「玉音奨」を授与され、当時のアメリカワシントン市長マリオン・バリーから「ワシントン名誉市民」として表彰されたほか、1981年7月21日が「鳳飛飛の日」として定められた。当時、この一連の出来事は台湾の新聞で数多く取り上げられ、すでにアメリカと中華民国との国交が途絶えたあとだったこともあり、「国民的外交の成功」（つまり政治家によるオフィシャルな形ではない、一国民による外交への貢献）として高く評価されたのだった。

以上のように、鳳による「愛国活動」は国民党政府からすれば格好のプロパガンダとなったが、その最たるものが、1982年7月にリリースされたア

アルバムの中で鳳が歌う「我是中国人（私は中国人）」という曲であると言えよう。

沈黙は軟弱を意味せず 忍耐は鈍感であるのとは違う
儒家の伝統的思想が 私たちを導いてくれる
八年の苦しい奮闘は 苦難に立ち向かう民族であることを証明している
最後の最後まで 決して軽率には関わらない
耐えられなくなったとき 身を奮い立たせる
同胞たちが苦しみ 山河が光復を待ちわびていることを憶えている
どこに生まれようとも 私は中国人
どこに居ようとも 中国の魂を抱いて

この歌詞には、国民党が文化政策の中心に据えてきた中華文化、八年の抗日戦争を経た勝利を正統性の根拠とする歴史観、苦しむ同胞を救うために大陸に光復をもたらす使命というように、国民党のイデオロギーが凝縮されている。ここで表現されている抗日戦争で受けた「苦難」は、1982年当時で言うならば中華民国が置かれた国際関係上の苦境に置き換えて聴くこともできる。その際、中華民国の一員としての中国人アイデンティティを聴き手に喚起し、民族意識を沸き立たせることを狙いとしているようである。このような曲を、本省人であり「台湾語訛りの国語」でお馴染みの鳳飛飛が歌うことは、作り手側が意図したかどうか定かではないにしても、国民党のアイデンティティ・ポリティクスを踏襲することになる。それは以下のようなものである。蒋介石の死後に跡を継いだ蔣経国は、急進化する党外活動、台湾ナショナルリズムを目の前にして、台湾で生まれ育った本省人や若い世代の外省人たちをどのように「中華民国」の規範に取り込んでいくかという問題にさらされていた。結果的に体制側は「中国」や「中国人」というアイデンティティの在り様に修正を加えていくことになるが、その転換点となったのが蔣経国の「文化建設」政策である。若林正丈はこの政策のことを、「(蒋介石時代の)『中華文化復興運動』」に示されるような一元主義的な中華民族・文化観においては、その対立面に立たされ抑圧・排除の対象にされてしまいがちな『台

湾的なるもの』をオフィシャルなナショナリズムの中に包摂していく、いわば『台湾包摂的』文化政策の展開であった」と指摘している⁵⁶。つまり、当時の国民党は台湾人というアイデンティティと矛盾しない上位概念としての中国人アイデンティティを人びとに抱かせることを目指し、鳳飛飛という歌手は奇しくもその模範的「中国人」像を、歌唱の中で体現していたと言える。

おわりに

本稿では、駆け足で鳳飛飛の歌手像を描き出し、戦後台湾史や大衆文化、国民党の政策などの考察の材料にもできそうな興味深いトピックを紹介することに努めた。このほか、鳳の女優としての仕事など紹介しきれなかった事柄や、一層掘り下げて考えなければならないこともある。また、上述のような国民党の政策に関わる活動内容だけを理由に鳳自身の政治思想を特定の何かに決めつけることはできず、筆者の研究目的はそれを明らかにすることではない。それよりも興味深いのは、ある一人の歌手がその多面性ゆえにさまざまなアイデンティティの語りに絡めとられようとするが、一方で鳳自身がそれらのことを、自らの歌手としての成功や、音楽界における確固たる地位の確立、名誉を手に入れるための手段として、したたかに利用しているようにも見えることである。

注

- ¹ 謝鴻文「《流水年華鳳飛飛》開啟「鳳學」」『全國新書資訊月刊』2010年4月号、國家圖書館編輯、pp.44-46。
- ² 『聯合報』1972年2月25日第7面。
- ³ 「不像明星的大明星—鳳飛飛」雑誌名・出版社不明、1979年。本稿を執筆するにあたって参照した資料の中には、鳳飛飛のファンの方々から提供していただいた雑誌や新聞の切り抜きが数多くある。そのため、中にはこのように雑誌名や出版社が不明のものもあることをご容赦いただきたい。本稿ではできるだけ年代が明確な資料を用いている。
- ⁴ 『聯合報』1975年1月7日第9面。
- ⁵ 「国語流行歌」とは、戦後の台湾で標準語＝国語とされている北京語によ

る流行歌のことを指す。北京語は公用語であるが、台湾住民の8割の母語は閩南語であり、そのほかにも少数ではあるが客家語、各原住民の言語を母語とする人びとがいる。戦後の言語統制を経て、台湾の流行音楽市場におけるメインストリームは国語の流行歌となったが、その間にも閩南語の古い民謡や植民地期に創作された流行歌、日本の演歌や歌謡曲に閩南語の歌詞を付けた（「日歌台唱」）カバー曲などが大衆に親しまれ、統制の網目をくぐって歌われ続けてきた。戒厳令が解除されたのちの1990年代には閩南語での楽曲創作も再び盛んになり、黒名單工作室、伍佰などの新しい世代のアーティストが台湾語でロックを演奏するなど趣向を凝らす中、改めて台湾語流行歌として一つのジャンルが確立されてきた。

6 「我最喜歡的歌星」『歌唱雜誌』出版社不明、1979年。

7 同上。

8 「鳳飛飛居家三件事」雑誌名・出版社不明、1975年。

9 台湾では一般的に「台湾語」、「台語」という時は特別な註釈がない限り「閩南語」のことを指している。閩南語の民謡や流行歌に関しても「台語歌曲」、「台語歌謡」や「台語流行歌曲」などと呼ぶことが一般的である。筆者もこれにならって「台湾語」および「台湾語歌謡」、「台湾語流行歌」といった名称を用いる。

10 鳳が2009年に出したアルバム『想要跟你飛』の中には、先立った彼女の夫へ想いが歌われた同名楽曲が新曲として収められている。この曲はサビのメインフレーズと曲の末尾の部分だけ台湾語で歌われており、それが反って聴き手の心に深くしみ込む。

11 外省人と一口に言っても、彼らの故郷は大陸の各地に散らばっており、出身地によっては北京語が上手く話せない者もいた。また、第二世や三世は生まれた時から台湾で暮らし、日常生活の中で本省人が話す台湾語を聞く機会もあるので、話せないが聞き取れる、あるいは少しなら話せるという人も中にはいる。テレサ・テンの場合は父が河北省、母が山東省の出身で、北京語が話される環境の中で育った。

12 正式な法制度だけでなく、新聞局や警備総司令部など政府関連機関が定期的に座談会を開催し、テレビ局や歌手など芸能界全体への圧力ともとれる取り決め事項が下されることもあった。それに対応するため、1976年には「映画・テレビ・劇場タレントの生活自律のための評議会」といったものが設立され、その目的は芸能界の風紀は正及びタレントの「自律」を促すことであったが、タレントたちは10項目からなる「タレント生活公約」に調印することが求められた。「反共国策に服して中華文化を保つ。」「奇怪な服装をせず、

だらしない長髪にしない。みだらで暴力的な演出に参加しない。」といった項目が含まれている。『聯合報』1976年10月7日第9版。

¹³ 1962年11月8日から台湾電視公司以放送された台湾電視公司史上初の歌番組であり、1977年まで続いた。台湾だけでなく東南アジアでも人気になり、歌手にとってはひとつの登竜門的な番組となった。林瑛琪『台灣的音樂與音樂家』台湾書房、2010年、p.155。

¹⁴ 石計生『時代盛行曲—紀露霞與台灣歌謡年代』唐山出版社、2014年、p.52。

¹⁵ 「ㄗㄞㄚㄣ」とは、「注音」という台湾で用いられている漢字の発音記号である。大陸中国が使用している、日本の中国語学習者にとっても一般的なピンインで表記するならば「zhi chi shi ri」にあたる。Yahoo news「客天后鳳飛飛 ㄗㄞㄚㄣ分不淸」（中時電子報より転載）2012年2月14日。

<https://tw.news.yahoo.com/%E5%8F%B0%E5%AE%A2%E5%A4%A9%E5%90%8E%E9%B3%B3%E9%A3%9B%E9%A3%9B-%E5%88%86%E4%B8%8D%E6%B8%85-213000294.html> (2015年1月23日アクセス)

¹⁶ 『聯合報』1972年2月25日第7面。

¹⁷ これは日本のブログサイトに投稿された記事を参照した。投稿者は1976年7月10日、テレサが日本で初めて行ったライブを新宿の劇場「新宿ルイード」で鑑賞した。その頃、鳳は同年同月17日から、歌番組『我愛週末』の司会者として活躍し始める。個人ブログ参照、

<http://tannoy.exblog.jp/2816455/> (2015年1月23日アクセス)

¹⁸ 陳建志『流水年華鳳飛飛』大塊文化、2009年、p.196。

¹⁹ 黄富三『女工と台湾工業化』交流協会、2006年、pp.33-35。

²⁰ 周玖琪「紡織成衣業女工與台灣的工業化發展」『兩性平等教育季刊』第22期、2003年3月1日、p.54。

²¹ 黄、同上、pp.69-83。

²² 「隔壁人家的女兒 臺灣歌壇 超級巨星」『時報周刊別冊』時報周刊股份有限公司、1979年。

²³ 個人ブログ参照。 <http://sdct2988.com/?p=20619> (2012年11月14日アクセス)

²⁴ 1969年に高雄市内に設けられた工業区である。当時、政府はこうした特別工業区を設けて「工業投資の吸引、対外貿易の開拓、最新技術の導入、就業機会の増加」の四大目標を掲げて、海外からの投資と国内の経済力、技術力増進を目指した。現在では東南アジア出身の外国人労働者が多く働いており、時代の変化を映し出す鏡のような場所でもある。經濟部加工出口區管理部編印『繼往開來 加工出口區 40週年特刊』、2006年、pp.16-17。

25 個人ブログより引用。

<http://g4260503.wordpress.com/2012/02/16/%E9%B3%B3%E9%A3%9B%E9%A3%9B%E4%B9%8B%E4%BA%8C/> (2012.11.14 アクセス)

26 『聯合報』1981年11月8日。

27 ここで言う「台湾語歌謡」とは、中国語では「台語歌曲」、「台湾歌謡」などと呼ばれる台湾語の歌曲のことを指すが、厳密に言えば古くから歌い継がれてきた民謡や童謡、日本植民地時代の流行歌、戦後の数十年間の間に創られた歌謡曲や合唱曲など時代やジャンルによって区分できるものを、便宜的にひとまとめにして「台湾語歌謡」と呼ぶことにする。

28 菅野敦志『台湾の言語と文字：「国語」・「方言」・「文字改革」』勁草書房、2012年、p.205。

29 ニクソン・ショックを皮切りに「正統中国」としての国際的地位を掌握し始めた大陸の中華人民共和国、その政権を握る中国共産党が、台湾を含めた中国統一のために掲げた政策。1979年元旦に鄧小平は「台湾人民に告げる書」を発表し、中共は「祖国の平和統一」を目標として統一戦線工作を展開する。1981年には「一国家二制度」形式を初めとする具体的な統一後の国家構想を発表した。若林正文『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会、2008年、pp.125-127。

30 1973年に当時行政院長の座にあった蔣経国が打ち立てた大規模なインフラ整備と重化学工業への投資に関わる政策。

31 『鳳懷郷土情』第三回目放送 1985年。 <http://youtu.be/5IbGcT5lL5E> (2015年1月23日アクセス)

32 小野『想要彈同調』皇冠出版、1992年、pp.180-181。

33 台湾電視公司以1976年7月から1977年6月まで放送された、鳳飛飛にとって初めてテレビ番組の司会を務めることになった番組。

34 鳳飛飛が番組で初めて演奏したという台湾語歌謡「月夜愁」は、もともと台湾の平埔族が歌い継いできた民謡の旋律を用いてつくられたもので、1933年に鄧雨賢による編曲、周添旺による作詞で発表された、当時の台湾語流行歌のひとつである。その後、皇民化運動の最中には日本人によって「軍夫の妻」という軍歌に歌い替えられたという経緯がある。

35 鳳飛飛公式サイト『鳳飛飛音楽之旅』「郷土濃情」より引用。

http://www.fongfeifei.com.tw/place/place_1_2.htm (2013年8月9日アクセス)

36 1977年3月リリース、歌林レコード。

37 1977年12月リリース、歌林レコード。

³⁸ 1979年12月リリース、歌林レコード。

³⁹ 1992年8月リリース、EMI。

⁴⁰ 台湾の1980年代ニューミュージック世代を代表する歌手のひとり。1982年に発売されたアルバム『之乎者也』は14万枚を売り上げるヒットとなった。「鹿港小鎮」といった「故郷を離れて暮らす人のノスタルジアを通して都市文明への倦怠感を映し出した」曲や、政治問題やアイデンティティを題材として社会批判を込めた楽曲を創作、演奏し、若者から人気を集めただけでなく、香港や中国といった台湾以外の中国語圏地域でも注目された。のちに鳳飛飛にも数々の楽曲を提供する。曾慧佳『從流行歌曲看臺灣社會』桂冠圖書、1999年、pp.179-184。

⁴¹ Yahoo news「台客天后鳳飛飛 ㄟㄟㄟ分不清」(中時電子報より転載) 2012年2月14日。

<https://tw.news.yahoo.com/%E5%8F%B0%E5%AE%A2%E5%A4%A9%E5%90%8E%E9%B3%B3%E9%A3%9B%E9%A3%9B-%E5%88%86%E4%B8%8D%E6%B8%85-213000294.html> (2015年1月23日アクセス)

⁴² Yahoo news「收視率破30 感謝您…成絕響」(中時電子報より転載) 2012年2月14日。

<https://tw.news.yahoo.com/%E6%94%B6%E8%A6%96%E7%8E%87%E7%A0%B430-%E6%84%9F%E8%AC%9D%E6%82%A8-%E6%88%90%E7%B5%95%E9%9F%BF-213000160.html> (2015年1月23日アクセス)

⁴³ Yahoo news「社論—追憶「一道彩虹」的美好年代」(中時電子報より転載) 2012年2月14日。

<https://tw.news.yahoo.com/%E7%A4%BE%E8%AB%96-%E8%BF%BD%E6%86%B6-%E9%81%93%E5%BD%A9%E8%99%B9-%E7%9A%84%E7%BE%8E%E5%A5%BD%E5%B9%B4%E4%BB%A3-213000881.html> (2015年1月23日アクセス)

⁴⁴ 「那些年我們一起聽的鳳飛飛」『台湾光華雜誌』2012年3月、p.34。

http://www.taiwanpanorama.com/tw/show_issue.php?id=201230103034.C.TXT&table=1&cur_page=1&distype=text# (2015年1月23日アクセス)

⁴⁵ 映画監督、俳優、作家など文化面で幅広く活躍してきた著名人の呉念真による追悼メッセージより。呉のフェイスブックページから引用した。

<https://www.facebook.com/wunienjen/posts/10150655463346648> (2015年1月23日アクセス)

⁴⁶ 詹宏志は台湾で作家、映画脚本などを手掛ける著名人である。このフレー

ズは、戒厳令解除の一年前となる 1986 年にリリースされた鳳のアルバム『掌聲響起』の発表にあたって作品紹介に添えられたものである。

47 『春寒』1979 年公開、監督：陳俊良、脚本：林煌坤、主演男優：梁修身、樺樑影業公司。日本植民地時代の太平山林場を舞台にした、時代に翻弄される男女の悲恋を描いた物語。主役らの物語と並行して南洋の戦地で戦う台湾人の姿が時折挿入されており、兵士のひとりが「日本人が憎い」という言葉を残して死んでいくようなシーンや、抗日運動を展開する台湾人が登場するシーンなどもある。鳳飛飛演じる秀蘭と梁修身演じる徐長榮の二人の仲を引き裂くのは、秀蘭に一目惚れしてしまった日本人少佐の横山であり、彼は悲痛な物語を見ている観客の無念や怒りのような感情を一挙に向けられる存在である。

48 本コンサートは中国電視公司、歌林レコードによる協賛で実施され、その映像は同テレビ局で放送されてお茶の間の観衆にも届けられた。

49 コンサート開催後、鳳飛飛は中国電視公司社長の梅長齡に付き添われて中国大陆災胞救済総会へ赴き、同会理事長の谷正綱から感謝状を受け取った。計 300 万元の義捐金のうち、チャリティで得たお金は 280 万元余り、足りなかった 10 数万は中国電視公司が出したとのこと。

50 ここで紹介されたのは范園焱氏、李天慧氏の二人である。范園焱は 1977 年 7 月 8 日に大陸福建から戦闘機で台湾に亡命した軍人。もう一人の李天慧について亡命時期は不明だが、チェリストであり、コンサートの最後に鳳の歌唱とともに「中華民國頌」を演奏している。彼らのような中華人民共和国から逃れて中華民国という「祖国」に「帰ってきた」人たちは、中国共産党に対抗する象徴としての意味合いを込めて「反共義士」と呼ばれた。

51 これは、当時すでに大陸中国で「昼は大鄧（鄧小平）の話聞き、夜は小鄧（鄧麗君＝テレサ・テン）の歌を聞く」と言われるほど流行し、こっそりカセットが出回っていたテレサを意識した発言であると思われる。鳳がこの公演のために中正記念堂の舞台に立つ約一年半前の 1980 年 10 月 4 日に、テレサも同じ場所でコンサートを開催し、「私が大陸で歌うその日は、大陸で三民主義が実行される日です」と語っていた。

52 『民生報』1981 年 12 月 30 日。

53 『聯合報』1982 年 1 月 8 日。

54 『中国時報』1981 年 7 月 23 日。

55 林若雱「僑民在美國台海兩岸政策中之角色分析」p.6。『僑務發展之外交意涵學術研討會 2008』公式サイトより。

<http://www.ntnu.edu.tw/deacd/conference/index.php?Select=3>（2015 年 1

月 23 日アクセス)

⁵⁶ 若林正丈『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会、2008年、p.138。